

棟居刑事の 殺人交差路



森村誠一



棟居刑事の 殺人交差路

森
村
誠
一

中央公論社

棟居刑事の殺人交差路
むねすえけいじ さつじんこうさろ

一九九五年二月二十五日初版印刷

一九九六年一月七日初版発行

著者 森村誠一
もりむら せいち

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八・七

電話 販売部〇三(三五六三)一四三一

編集部〇三(三五六三)三六六四

振替 〇〇一二〇一四一三四

印刷 大日本印刷

製本 大日本印刷

Printed in Japan ©1996 Seichi Morimura

ISBN4-12-002530-6 C0093

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えます。

棟居刑事の殺人交差路

目次

同夜の成行き	7
致命的な落とし物	26
相性の悪い死体	38
別件の止どめ	57
第三の示談	75
殺人の原価 ^{コスト}	97
立て替えた恐喝	108

殺人の前戯

犯罪に隠された犯罪

遅すぎる捜索願

殺人のプレイパートナー

愛の要塞

不完全犯罪の記念品

131

147

173

191

210

221

装幀
河野治彦

棟居刑事の殺人交差路

同夜の成行き

1

「私、やつぱり落ち着かないわ。いまにも奥さんが帰って来そうな気がして」

しまぎきりゆういち
島崎龍一の寢室のベッドに二人だけで向かい合っている、まえかわやすこ前川保子は情事に集中できない様子である。

そのせいかせつかくの二人だけの夜というのに、一分の隙もなく密着した二人の肌の間にすきま風が吹き入るような気がする。

「心配しなくてもいい。あの女が絶対に帰って来るはずはない。夫婦とはいいいながら、もう二年も寢室はべつにしている。ぼくが東京の自宅にいるときは、あの女は箱根の別荘へ行っているし、ぼくが箱根へ行けばあの女が東京へ帰って来るという風に、なるべく顔を合わせないようにしているんだ。ぼくが東京の家にいるとわかっているのに、あの女が絶対に帰って来るはずはな

いよ」

島崎は保子の輝くような裸身を抱きしめた。

「あなたと奥さんの間が冷え切っているのはよくわかつているけれど、この家の中には奥さんのおいが残っているのよ。あなたに誘われるままに従って来ちゃったけど、やっぱりホテルへ行けばよかったわ」

保子は悔やんでいるようである。

「いまからホテルへ行くのも面倒だし、時間をもつたいたないよ。ここはぼくの城だ。あの女と離婚が成立すれば、きみの城になる。さあ、安心して二人だけの夜を楽しもう」

「そうね、私、あなたに会うつど、いつも一期一会とおもうの。今日の出会いが最後で、もう二度とあなたに会えないような、そんな切羽つまつた気持ちがいっつもしているのよ。気のせいかな、あなたとの一期一会の出会いを無駄にしないわね」

ようやく保子も島崎の方に気持ちを集めたようである。

二人は飢えた獣が貪るようにたがいの身体を貪り合った。

「ああ、美味しいわ」

保子は渴き切った砂漠の旅人が喉を鳴らして水を飲むように、官能の甘い雫を最後の一滴まで吸い取った。

「ぼくもだ」

貪婪な食欲にかけては島崎の方が保子以上である。

彼はいくら食っても満ち足りるということがないかのように、保子の身体を食べ漁った。

二人の身体が一体となって溶接し、すきま風の入り込む余地はなくなった。

交わったまま少しうとうとすると、もう体力が充実している。

「私たち、底なしだね」

保子が苦笑しながらも、底なしの欲望に耐えられるだけのたがいの身体の備蓄を喜んでいる。

「こういうのをセクソンと言うんだそうだ」

「セクソン？」

「セックスマラソンのことさ。きみは素晴らしいセクソンランナーだよ」

「あなたもよ」

二人は互いの性ポテンシャル 力を讀え合つて、また行為を続行した。

二人だけの忘我の時間がどのくらい経過したであろうか。

島崎はふと背中に空気の流れを感じ取った。密閉した室内に情事のおいが生臭くこもり、澱よどんでいる。

だが、島崎が背中に感じ取った空気は、情事のおいと熱気に染められていない異質の空気である。そんな空気が二人だけの密室に入り込むはずはない。

不審の念が島崎の胸に兆きざしたとき、背筋が冷えるような視線を感じた。

はっとした瞬間、保子が悲鳴をあげた。溶接していた二人の身体が離れた。

「やつぱり、こういうことだったのね。変な予感がしたので帰って来たのよ」

いつの間にか寢室の出入口に島崎の妻の潤子^{じゅんこ}が立っていた。

保子は毛布の下に身体を縮めた。

「一体いつ帰って来たんだ」

島崎はうろたえながらも声を発した。

「いつ帰って来ようと私の勝手よ。この家は私の家よ。さかりのついた泥棒雌猫の自由になんかさせないわ」

潤子が抑えた口調で言った。

だが、その抑制の底に嫉妬と怒りのマグマがふつふつと煮えたぎっているのがわかる。

「あなたがどんな雌猫と交尾しようとあなたの自由よ。でも、私の家に汚らしい雌猫を引っ張り込まないでちょうだい。泥棒猫、出て行け」

潤子はいきなりかたわらにあつた花瓶を投げつけた。

「危ない」

咄嗟^{とつさ}に身をひねったので、花瓶は島崎の身体をかすめるようにして背後の壁に当たって碎けた。

また保子が悲鳴を發した。

「ぎゃあぎゃあうるさいわね」

潤子が身体を移動している。移動している方角の先に目を向けた島崎は、ぞっとした。そこには彼が趣味で集めたガレ工房のガラス製品をディスプレイしたパネル棚がある。

「潤子、やめろ。やめるんだ」

彼女の身体に充滿した凶暴な気配を察知した島崎は、必死に声をかけて牽制した。

「こんなものが集められるのもだれのおかげとおもってんのよ。ちくしょう」

潤子の声の抑制が外れた。

パネル棚に近づいた潤子は、そこにディスプレイされていた島崎の宝物に手を伸ばした。

「やめろ」

島崎は絶望的に声をかけた。

宝物を破壊される恐怖よりは、発狂者を火薬庫に追い込んだような戦慄が島崎の背筋を走った。

「こんなもの、こうしてやる」

ガレ工房の花瓶や電気スタンドやガラス器などを手当たり次第に投げつけてきた。

こちらは裸である。直撃を受ければかなりのダメージになる。島崎の宝物のコレクションが、いまは危険極まりない凶器となっている。

いまや潤子は嫉妬に狂った鬼になっていた。愛の一かけらも残っていない夫婦であったが、自分の留守中、女を家に引っ張り込んでいた島崎に、嫉妬の炎を点じられた。

愛の失せた夫であつても、他の女に寝取られるのは許せない。しかも、寝取った場所がなんと自分の家であつた。

奪われたものは夫だけではなく、自分の領域を侵され、汚されたような気がして、嫉妬と怒り

に二重に焙りたてられている。

保子は毛布の中に身を縮めたまま悲鳴をあげつづけている。毛布を被っていても直撃のダメージは防ぎ切れない。

島崎は生命の危険すらおぼえた。

ベッドサイドに江戸時代の進物として使われた真鍮飾り付きの木太刀が置いてあったことが、双方の不幸であった。

咄嗟に木太刀をつかんだ島崎は、無我夢中で潤子に向かって振り下ろした。木太刀は潤子の脳天に当たっていやな音を立てた。

ぐえつという妙な声をあげて、潤子は床の上に頽れた。

倒れた潤子に島崎は我に返った。床の上にのびた潤子はびくりともしない。島崎と保子の方を向いた潤子の口角から、血の混じった泡が吹き出している。

「まさか」

島崎がつぶやいた。

「ねえ、なんだか様子がおかしいわよ」

毛布にくるまっていた保子が震えながら言った。

恐るおそる潤子に近づいた島崎は、肩に手をかけて揺すった。

「潤子、おい潤子」

声をかけたが、まったく反応はない。手をかけて揺すっても、島崎が加えた力のままに動くだ

けである。

先刻まで怒り狂っていた嫉妬の鬼は、一個の物体に還元しているようである。

「まさか。死んじやったみたい」

保子が悲鳴そのものの声をあげた。

島崎は茫然としたまま、どうしてよいかわからない。

「すぐ救急車を呼んで」

保子の方が先に我を取り戻した。

「救急車は死体を運んでくれないよ」

ようやく島崎も事態の深刻なことを悟った。

「それじゃあ、警察に連絡しなければ」

保子がナイトテーブルの上にある電話機の方へ手を伸ばしかけた。その手を島崎が押さえた。

「ちょっと待て」

「なにを待てと言うの」

「警察を呼べば、ぼくは殺人者になってしまう」

「なにを言ってるのよ。これは正当防衛よ」

「正当防衛が成立するとおもっているのか。きみがこの場にいるんだよ」

言われて、保子も事態を正確に認識した。

夫と愛人が不倫を働いている現場で、妻が殺されたのである。

「警察が来る前に私が姿を消したらどうかしら」

「きみの痕跡を隠し切れないよ。警察が調べたら、きみの痕跡が至るところに残っている。それに仮に正当防衛の余地があつたとしても、それが成立するまで裁判で大変な時間がかかる。その間、ぼくは拘留所に勾留（こうりゅう）される。きみも共犯の疑いをかけられて無事ではすまないよ」

「共犯？」

保子の面が紙のように白くなった。

「ぼくときみが否定しても警察には通用しない。警察にしてみれば、不倫のカップルが共謀して男の妻を殺害したと見るだろう」

「やめて……」

保子が面を覆った。

「ぼくたちは世間で言う浮気や不倫ではない。真剣に愛し合っている。この女と離婚してきみと結婚するつもりだった。その矢先の事故だよ」

「でも、警察はそうは釈とらないとしたら、どうしたらいいの」

最初の衝撃から醒めた保子は絶望に打ちのめされている。

「落ち着いてよく考えるんだ。潤子は今夜、箱根の別荘に行っていることになっている。ぼくらの関係を探るために密かに舞い戻つて来たのだから、だれにも報しせず別荘から出て来たはずだ。つまり、世間は彼女が箱根にいますとおもっている。だれも彼女が今夜ここへ来た事実を知らない。すると、ここで死んだこともだれも知らないわけだ」